
24hours

切香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

24 hours

【Nコード】

N8703L

【作者名】

切香

【あらすじ】

BLEACH二次小説。イジメられっ子の誠子は、遂に自殺を決意する。飛び降りる寸前に出会った少年は、実は死神だった。

1. ひとりぼっちの少女

「あと、24時間だ」

初恋のひとは、私に向かって、そう言った。

その口元が動くのを、私は黙って見つめることしかできなかった。

「お前はあと24時間で、死ぬ」

―― 24 hours ――

放課後の教室は、授業から解放された後の、楽しそうな声であふれていた。

「ねえ！」

突然私の方にもはしゃいだ声が飛んできて、ドキッとして反射的にそちらを見る。

友達に声をかけられた時用の、とっておきの笑みを浮かべようと努力しながら。

ランドセルを背負った女の子たち数人が、キヤーキヤー騒ぎながらこちらに目を向けてる。

「南町のところに、新しいゲーセンできたの知らない？」

その視線の先を確認すると同時に、私の顔から貼りつけた笑みが滑り落ちる。

視線を逸らすと、スツ、と立ち上がった。

「苑美^{そのみ}ちゃん、行こうよ！」

「うん、行く！」

弾んだ声をあげて、私の脇をすりぬけて女の子たちに合流したのは、

前原苑美だった。

プリーツスカートの裾が、楽しげに私の視界で揺れる。

栗色の波打つ髪が天然パーマで、毎朝の寝癖直しに苦勞してること。体が細すぎて、食べても食べても女の子っぽい体型になれないこと。そんな半年前の悩みを私は知ってるのに、今の苑美はまるで別人みたいだ。

明るい声に追い立てられるように、私はひとり教室を出た。

苑美は、私の友達。いや、「友達だった」かな。

口をきかないどころか、目も合わせなくなつて、もう随分になるから。

私は自分でも嫌になるくらい、内向的な性格だった。

例えば体育でバスケットボールの試合をするよりも、部屋でひとりで本を読んでいる方が楽しい。

人と話すときも、大勢で盛り上がるよりも一対一のほうがしっくりきた。

学級委員長でも班長でも、「長」と名前がつく仕事に、十一年の人生で一度もついたことがないし、つきたいとも思わない。

そんな私の性格に、ぴたりと合ったのが苑美だった。

あの子は私と同じように本が好きで、ふたりで最近読んだ本について、何時間でも話していられた。

あの頃はクラスメート達の輪の中に普通に入つて、放課後はゲーセン巡りすることもあったのに。

今では、どうやって笑つて、何を話していいのか分からないの。まるで大縄跳びをしていて、どのタイミングで輪に飛び込めばいい

のかタイミングを図っているうちに、順番を失ってしまったみたい
に。

半年間もともにクラスメートと話していない、なんて異常なことに決まってるから、すぐにそれが不安になりだした。

声を潜めて話しているのを見かけたり、視線を向けられたりするたびに、私の噂話をされているのかと体が固くなる時期もあった。

でも、それからしばらくして、気づいてしまった。

噂話をされるどころか、私はみんなの視界にすら入ってきてない。みんなの視線は、私がまるで透明人間になったみたいに、私の体をすり抜けてしまうみたい。

どうして、こんなことになってしまったんだろう。

廊下をひとり歩いていると、思わずため息が漏れた。

キュツ、キュツ、と靴底で廊下が鳴る。

あちこちの教室からは笑い声が弾けているのに、ここは切り離された空間のように静かだ。

教室にある時計の秒針の音まで耳を澄ませば聞こえそうだった。今日私は一体何言、教室で言葉を発しただろう。

出席を取る時に「はい」。

数学の授業中に先生に当てられて「三分の一」。

それから。それから……？

そこまで考えて、私はそれ以上考えるのを止めた。

下駄箱にたどり着いたとき、私の名前の「辻村誠子」と張られたシールの上に、ボールペンで字が重ねられているのに気づいた。

—— キモい、ブサイク、学校来んな。……

目にした途端、まるでボールが顔面に投げ込まれたかのように、くらりとした。

息が詰まり、反射的に周囲を見渡した。階段にも廊下にも、誰もいない。

誰もいないのに、大勢の人間に物陰から笑われている気がして、私はしばらくその場に固まったままだった。

震える指先で、名前シールに触れる。何度見てもなかったことにはできないその文字に、息も震えた。

半年前までは普通に友達だったんだから、どれが誰の筆跡なのかはすぐに分かる。

どれも、仲良くしてた人のものだった。

—— ダサい名前。

ひととき大きく書かれたその字は、クラスで一番レベルの高い子のものだ。

キレイだし、成績もいいし、いつだって友達に囲まれて自信たっぷりに話してる、桐原知美という子に違いなかった。

一人でいても存在感があるし、大勢でいても目立つ。

そんな子に勝ち目があるはずなのに、なんで私なんかにかまうんだろう。

私は冷たい指先でもたつきながらシールをはがし、隠すように鞆のポケットに入れた。

ダサい名前だってことは、分かっている。

誠実な子になれ。そういう名前の由来だと親から聞いた。

「人の顔色を見るなんて自分がないみたいで、カッコ悪い」ってみ

んな言う。

でも、私はそうやって生きてきた。努力して努力して……それでも私は居場所を失ったのを知った。

どうして、私は皆と同じように、仲良くできないんだろう。

どうしてみんな、私を見るとときに他の子たちと「違う」目つきになるんだろう。

私はこんなに「みんなと同じ」になりたいのに。

まるで、私の顔に、「私はみんなと違います」って書いた紙が貼りつけてあるみたい。

私はそっと、長く伸びた前髪で顔を隠した。

「ただいま」

「あ、誠子。おかえりなさい」

玄関の扉を開けて靴を脱いだところで、台所からお母さんの声が聞こえた。

「お母さん、これから夜勤だから。お父さん、今日も遅くなると思うから、晩ご飯適当に食べておいて」

「うん」

お母さんの視線をうなじの辺りに感じながら、私は頷く。

靴を玄関の隅に揃えて振り向いた時、台所の扉に手をかけてこちらを見ているお母さんと目が合った。

「誠子、あんた最近……」

「え？ 何？」

いつも通りの会話に投げ込まれた異音。

お母さんは私を見て、何だか不思議そうな顔をしていた。「普通じ

やないもの」を私の顔に見つけたみたいな。

何の接点もあるはずがないのに、クラスの子たちと全く同じ表情をしている。私の心臓が、勝手にはね上がった。

私、また何か「失敗」しちゃったのかな。

慌てて視線をそらすと、自分の今の行動を反芻する。

その拍子に、玄関に置かれた姿身に目が行き……そこに映った女の子を見て、ぎよっとした

誰？ って、一瞬思った。

長い黒髪は、梳かしも揃えもしないから、ところどころほぐれてザンバラになっている。

前髪も長すぎて、目元がほとんど見えないくらいだ。

その中で唇だけが、自分でも薄気味悪いほどに卑屈な笑みを貼りつけていた。

私、自分が笑っていたことすら、知らなかった。こんな顔で、私は毎日過ごしていたのか。

—— キモい、ブサイク。

あの文字がフラッシュバックする。

「ごめん、私ちょっと気分悪くて。部屋に行ってる」

言葉を途切れさせたお母さんの脇をすり抜け、二階への階段へと向った。

「ちょっと……誠子？ どうしたの！」

「ほっといて!!」

唐突な私の大声に、お母さんが立ちすくむのが分かった。

ハッとしたけど、それを気にかける余裕はない。私は階段を駆け上がった。

部屋に入って、ボタン、と扉を閉めた私は一人になった。

陸で息ができずに、パクパク口を開ける瀕死の魚のように、喘ぐ。たりない、たりない、この世界で生きていくには何かが決定的にたりないのだ。

「助けて……助けて……助けて」

気づけば、同じフレーズを何度も、何度も繰り返してた。

もし今の私を誰かが見たら、ついに頭がおかしくなったと思うだろう。

思わず部屋の中を見回して……その場にズルズルとへたりこんだ。

誰か、私の話を聞いて。目を合わせて、笑いかけてくれればそれだけで息ができる。

いろんな人の顔を、目まぐるしく思い浮かべる。

宛美。お父さん。お母さん。先生……

ひとりずつダメ・ダメ・と消していった……やがてすぐに誰の名前も浮かんでこなくなった時、はつきりと思ったのだ。

私が消えてしまいたいと。

2. 少女と死神の出会い

「お、お大事に。日番谷たいちよー」

クロサキ医院に背を向けた時、玄関口に俺を見送りに出た黒崎がプツ、と噴出した。

笑うな。

ていうか、こういう時ばかりワザとらしく隊長って呼ぶんじゃないやねえ。

俺だってうんざりしてるトコなんだ。

死神が花粉症になるって、アリエネーだろ！！

何か言い返してやろうとしたら、くしゃん、と立て続けにクシャミが出たから、諦める。

「まあ、花粉症はアレルギーだからな。一時的に薬で症状を治められても、中々完治はしねえよ」

「お前はそれでも医者か！ 治せねえのかよ」

「俺は医者の子で、医者じゃねえんだよ。大体、全部の病気がクスリで治ったら、お前らの商売立ちゆかねえだろ」

「……死神は商売じゃねえ」

そりや確かに、病死する人間がいなくなれば死神商売は閑古鳥だ。

松本あたりが喜ぶだろうが……そこまで考えたところで、またくしゃみが出た。

死なないレベルの病気に、こんな厄介なのがあるとは知らなかった。

それを見下ろした黒崎が、さっきよりは若干同情的な声で続けた。

「とはいえ、その症状は義骸だけのもんだろ？ さっさとソウル・

ソサエティに戻って、義骸脱ぎ捨てたほうが早いぜ。

もしこの町に虚が出れば、俺が何とかしとくから」

「ああ、頼む」

「任しとけ」

こいつは正式な死神でさえないが、その実力も気性も、信頼に値する男だ。

俺は軽く手をあげると、その場から歩き出した。

「あっ、ちよっと待て冬獅郎！」

その背中に、すかさず黒崎の声が飛んでくる。

「ンだよお前は、戻れつつたり待てつつたり」

「今すぐ戻らなくなたっていいだろうがよ。家の中なら症状そんなでもねえみてえだし、ちよっと待つ気ねえか？」

「待つって何を？」

「……遊子と夏梨だよ。アイツら、お前に会いたがってる」

俺は返事の代わりに頭を掻いた。

アイツらに出会ったら困るから、俺は早くソウル・ソサエティに帰ろうとしてるんだが！？」

「あの二人には、もう会わねーよ」

「はぁ？　なんで？？」

「禁忌だからだ」

俺はできるだけ感情を込めず、短く返す。

「死神は、全ての魂に平等に接すべし。魂が現世にしようが、ソウル・ソサエティにしようが同じだ。

お前だって分かるだろ？　死神が魂をひいきするようになったら駄目な理由が」

黒崎は、俺の言葉にぐっと詰まったが、低い声で言い返してきた。

「でも、お前は違うだろ」

特定の魂を特別扱いはしないはずだ。
その言葉を、俺は心の中で反芻する。

「……さあな」

「……お前」

「じゃあな」

これ以上、会話を続ける気にはなれなかった。
眉を顰めて、歩み寄ってきた黒崎の気配を感じると同時に、瞬歩で姿を消す。

例えば、夏梨が死んで流魂街の中でも治安の悪いエリアに送られることになったら？
自分でも認める。

今の俺にとっては、黒崎の質問はちよつとばかりキツかった。

「それにしても」

民家の屋根の上で、くしゃん、と俺はまたクシャミした。

—— 技術開発局の連中、クロス……

いくら本物の人間らしく義骸を作るって言っても、「花粉症体質の義骸」なんて普通考えつかねえだろ。

わざわざ俺の義骸にそんな体質を組み込んでくるとは、遠まわしにケンカ売ってんのかアイツらは？

とはいえ、「重霊地」である空座町のパトロールは欠かせない。

いつどんな虚や破面が現れるか分からない、危険な状態が続いているからだ。

——ざっと見回り済ませたら、後は黒崎に任せるか。

そう思っ、暗い夜道の角を曲がった時だった。

上から気配を感じ、俺は上空を見上げる。

「誰だ……あれ」

屋上に立っている小さな影が、ひとつ。

背格好は夏梨や遊子たちと似たようなもんで、女だ。

自分が何をしてるか分かってない、そんなボンヤリとした表情だ。

屋上の手すりの向こうに自分が立っていて、一步踏み出せば落ちて

死ぬと分かっていない、ということ。

女のスカートが風にあおられている。

この強風じゃ、何かの弾みに、何もしなくても落ちてしまうかもしれない。

——どうするか。

俺はつかの間、逡巡する。

規則が多くてイヤになるが、死神は人間の自殺を止めてはいけない。

死神は死者の魂を連れて行くのが仕事であって、生きるの死ぬのと

いう決断に口を出すのは範疇外だからだ。

通り過ぎようとして、足がためらう。

自殺を見過ごせないと思ってしまうのは、死神になる前の遠い昔、人間として生きていたはずの俺の、記憶のせいかもしれない。

まあ、覚えているわけじゃないが。

俺はひとつ息をつくと、ビルへの非常階段に身を滑り込ませた。

「おい！ 戻れ！」

息を切らせて屋上に駆け込むと、手すりの向こうの人影に声をかけた。

見ると、俺とほとんど背格好は変わらない、やっぱり子供だ。

俺の声が聞こえているのかいないのか、俺に背中を向けたままだ。

「中に入れて……」

カシャン、と音を立て、手すりを乗り越えようとした時だった。

その金属音に我に返ったのか、子供が夢から覚めたような表情で振り返った。

タン、と軽い足音を立てて、子供の目の前に降り立つ。

長い前髪に隠れた大きな瞳が、まっすぐにこちらを見た。

「お前……」

言葉が続けようとした途端。俺はまたクシャミの発作に襲われて、かがみこんだ。

「や……」

首を振って、その子供が後ろに下がろうとする。

「危ねえ！」

ズル、と子供の足が屋上からずり落ちそうになり、俺は若干涙目ながら手を伸ばした。

「嫌……」

俺がその手首を掴んだ時、子供が絶叫した。

「来ないでっ！！！！」

「ん？」

いきなりドン、と突き飛ばされる。

「え？」

ぐら、と体が揺れた。そう思った時には、俺の体は宙を舞っていた。

突き飛ばされた弾みで、屋上から落下しているんだ。
俺は落ちながら状況を把握する。

義骸でも、ここから落ちて死なないくらいの運動神経は与えられている。

この壁を蹴って、向こうの一段低い建物に飛び移る。
それくらいの芸当はできそうだ。

でも、それをあの子供に見られたら、普通じゃない動きに見えるのは確かだろう。

だからって、このまま道路に落ちたら痛いし、技術開発局から小言を食らう。

大体今技術開発局の奴らの顔を見たら最後、氷漬けにしねえ自信はねえぞ。

――しょうがねー。死神に戻るか。
トン、と自分の額を指先で突く。

それだけの動きで、俺は義骸と死神の体に分離する。

バサリ、と見慣れた死覇装が夜風にはためく。

ガッ、とそのまま落ちかけた義骸の手首を掴み、俺は上空を見やった。

屋上にいた子供の目からは、俺が闇に吸い込まれる姿だけが見えたはずだ。

「いやあ！」

甲高い悲鳴が聞こえ、子供が手すりを乗り越え、屋上に戻るのが見えた。

どうやら、経緯はとにかく、自殺は諦めてくれたみたいだ。

俺としても、不用意に長居する気はない。

隊長の俺が、死神の本体のまま留まれば、今の不安定な空座町には悪影響を及ぼすかもしれないからだ。

—— やれやれ。

俺はため息をつくど、その場を後にした。

3. 崖っぷちの一目惚れ

キンコンカンコン……

このチャイムが流れれば、授業はこれで終わり。

「よし！」

あたし黒崎夏梨は、この瞬間のために生きている、といってもおかしくない。

なぜなら授業が終われば、今日もサッカーができるから！

「おい、あたし先行ってるぜ！」

「おう、俺達もすぐ追いつくから！」

何人かの仲間とアイサツを交わし、ボールを蹴りながら廊下に出た時だった。

「ねえ。どこかの小学校に、ハーフの子っていない？ 3年生くらいで、銀色の髪で青い目の……」
はっ？

あたしは、「銀色の髪で青い目」に反応して、声のほうを見やった。

「さがしてるの」

必死な声で、廊下に出てる隣のクラスの女の子たちに話しかけてる。

——だれだ？ あの子……
前髪を目にかかるくらいまで伸ばしているせいで、顔に影が差してる。

ベージュのTシャツと茶色いスカートを履いた、地味な雰囲気の子

だった。

「は？ 何いってんの辻村？ なんでそれをあたし達に聞くわけ？」
返したのは、アカラサマに面倒くさそうな声。

「だ、誰に聞いていいか分からなかったから……」
途端に、しどろもどろになる「辻村」って呼ばれた子。

——ん？ 辻……？

ちよっと前に、辻なんとかって名前のモテる子がいたって聞いたけど、別人か。

「変な子。行こ？ 苑美」

「う、うん……」

苑美って呼ばれた子が、ちよっと躊躇ためらいがちに辻村さんと他の女の子たちを見比べる。

辻村さんが俯いたまま無言なのを見ると、そのまま他の女の子達についていった。

「……ねえ」

あたしは、去っていった女の子達の方を見つめていた、その子に近寄って声をかける。

びく、とその肩が揺れた。

「あな、た……黒崎、さん」

お？ あたしのこと知ってんのか。

あたしに向けられた目は、警戒と不安でおどおど揺れてる。

「うん、あたしは黒崎夏梨。隣のクラスだよ」

あたしは笑顔をつくって、敵意がないことをアピールする。

「わ、私に何？」

「ああ。銀髪で青い目の子に覚えがあるんだ。もしかしたら知っている奴かなーと思って」

銀髪。碧眼。そして3年生（くらいの身長）。

大体そんな奴、この辺探しても、二人といたない気がするしな。

日番谷冬獅郎。職業、死神。

あたしより背は低いくせに、死神の世界ではエリートらしい。あたしは、その落ち着き払いまくった瞳を思い出した。

「あ、あの。話、聞いてくれる？」

「もちろん！」

サッカードは残念だけど。放っておけないしな。

あたしがそう答えると、辻村さんはなぜか、泣きそうな顔をした。

「じー！ 自殺ウ？？」

夕日が差し込む土手で、あたしは素っ頓狂な声をあげていた。

「こ、声が大きいよ、黒崎さん……」

泣きそうな声で、辻村さんがあたしを見上げる。

犬の散歩をしてたおじいさんとか、土手でしゃべってる人たちが振り向くのを見て、あたしは続く言葉を飲み込んだ。

「それで、辻村……さんを止めようとしたのが、銀髪の奴だってっというのかよ」

辻村さんがうなずくのを聞いて、あたしは必死に頭を整理した。

この辻村って子は、あろうことか、昨日の夜屋上から飛び降りて死のうとしたらしい。

そして、それを引きとめようとしたのが、銀髪の少年だった。

でも、混乱してたこの子は、手すりを乗り越えてきたその少年を、突き飛ばしてしまった。

その拍子で少年は落下したが、悲鳴や落ちる音などは、一切聞こえてこなかったらしい。

それでも落ちたのは間違いのないわけで、辻村さんは震えながら、階下へ降りた。

そして少年が落ちた辺りを探してみたが、体はおろか、血の跡ひとつなかったそうなんだ。

まるで、掻き消えてしまったかのように。

「……聞くけど、その高さ。どれくらいあったんだ？」

こんな時に遊子だったら、大丈夫だったの？ とか、辛いことあったの？ とか、気の利いたことが聞けるんだろうけど。

あたしの口について出たのは、嫌になるくらい現実的な質問だった。

「30メートルくらい、かな」

30メートル。

それを聞いた、あたしの唇が震える。

30メートルは、間違いなく落ちたら死ぬ高さだ。

この子は一体どんな気持ちで、昨日の夜そこに立っていたんだろう。一歩踏み出したらそれだけで、この子はもうこんな風に、あたしと話すことなんてなかったんだ。

自殺なんて、違う世界の……ニュースだけの話だと思ってた。

他人事だっと思うことで、安心しようとしたのかもしれないけど。まさか隣のクラスの子から、そんな告白を聞くことになるなんて。

そしてもうひとつ、あたしを動揺させたのは、その銀髪の少年が、おそらく冬獅郎に違いないだろうってこと。

同じような外見の子が百歩譲って他にいたとしてもだ。

あたしの知ってる日番谷冬獅郎は、ムカつくくらいクールで、他人に無関心に見える。

でも、誰かが文字通り死ぬほど困っているところを、黙って見過ごしたりは絶対にしないと思う。

「人間らしい」って言葉をあいつに使うのは変かもしれないけど、そういうところは人間よりも人間みたいなやつだから。

「どうしたらいいか、わからなくて……」

震える辻村さんの声に、あたしは我に返った。

「……安心しろって。そいつは絶対に死んでないから」

あたしは、辻村さんを見下ろして、断言した。

辻村さんは、まるで救いを求めるようにあたしをじっと見つめてくる。

「もしそいつが死んでたら、絶対に今頃ニュースになってる。でも、何もニュースに出てないだろ？」

大体、辻村さんが降りていった時に、大怪我してるにしても死んでるにしても、見つけられるだろ？ 普通。

方法は分からないけどさ、途中で何かにつかまったりして下には落ちなかったんだよ」

第一、死神の冬獅郎が地面に落ちて死ぬ、なんてありえない。

こんな女の子に突き落とされたのはらしくないけど、冬獅郎だったら、落ちる前に何とかしてその場から逃れるだろうから、心配はし

てなかった。

今はそれよりも、辻村さんを落ち着かせるのが先だ。

「このことは、黙っておくから。辻村さんも忘れなよ。でも……」
どうして、自殺なんてしようとしたんだよ？
その言葉が、うまく口から出てこない。

「ね、ねえ。黒崎さん」

あたしがひねり出す言葉に苦しんだと、辻村さんがあたしを見上げてきた。

「銀髪の男の子を知ってるって言ったよね？ あたしが会った子とは、違うのかな……」
う。

あたしはまた、言葉に詰まる。

「会うことって出来ないのかな？ そしたら、同じ子かそうじゃないか、分かると思うの。」

もし違ったら……幻だったって思うようにするから」

アイツに会う方法。そんなもん、あたしが聞きたいよ。

「なんで、そいつを探そうとするんだよ？ 見つけちゃったら大変だろ？」

代わりに、疑問に思ったことを口にしてみる。

屋上から突き落とすなんて、殺人未遂って言われてもおかしくないだろ。

加害者が被害者に会いたいなんて、普通は思わないはずなんだけど……

「そ……それは」

また俯いてしまった辻村さんの顔を、あたしはしゃがみこんで覗き込む。

「……え」

思わず、声が出てしまった。

その顔が、まるで……二倍の夕日に照らされてるかのようになり、真っ赤だったから。

4. 「死神」に会いたい

「一目惚れってやつですか。最近の小学生は進んでますねえ」

このアタシ、浦原喜助がそう言うのと、ジン太がギロリ、とこつちを睨んできたのはお約束で。

「あんな白髪ヤローのどこがいいんだ！」

「嫉妬かい？ ジン太」

「だー！！ うっせえって……！ 大体よォ、たった一瞬の話だろ？

顔なんかロクに見えねえだろうに、一目ぼれなんてするわけねえよ」あくまで、一目惚れ説を否定するとは。往生際が悪いですねェ。

「吊り橋効果ですね」

「ハア？」

「吊り橋で出会った男女は恋に落ちやすい。なぜなら、怖くてドキドキしてるのと、恋愛でドキドキしてるのを混同しちゃうんですね」しかし、自殺しようって人間は、他の何を考える余裕もないでしょうに。

そんな瞬間に一目惚れさせるなんて、日番谷冬獅郎サンも罪な男ですね。

「何ニヤニヤしてんだよ、てめーはエロオヤジかよ！」

はいはい。エロオヤジですとも。

「うっさいジン太！！ こっちはマジメな話してんだよ！」

バシッ、と響いた少女の声に、静まり返る浦原商店の居間。
といっても、部屋にはアタシとジン太しかいませんが。
さすが、黒崎一護サンの妹ですねェ。声にドスが効いてます。

「自殺するって言ってんだぞ。あたしと同じ学年の子が」

「聞いたんですか？ 事情」

「……ううん」

しばらく沈黙してから、首を振る夏梨サン。

ああ、聞いちゃいましたね、事情。

「自殺」なんて本人にとって一大事を選んだ理由を、軽々しくアタシ達に話すべきじゃないって思ったんでしょう。

一見大雑把に見えて、妙に達観したところのある子ですからね。

その場その場で熱くなりながらも、常に遠くまで見通して、何が最善か考える冷静さも持っている。

なかなかどうして、アタマのいい子ですよ。

「で？ 夏梨サン。辻村サンって子に言っちゃったんですか？ 日番谷サンに会わせるって」

「う……うん」

途端に俯く夏梨サン。そりゃ、その状況じゃ気持ちはわかりますけどねェ……

深い深いため息。そんなのは夏梨サン、アナタらしくないですよ。

「辻村さんは自殺しようとするほど追い詰められてるんだ。

だから冬獅郎に、人間のフリして会ってもらいたいんだけど、連絡のつけ方しらねえし……方法知らない？」

いつもの元気はどこへやら。

確かに、隣のクラスの子が自殺未遂なんて、これくらいの子にとっ

てはショックでしょう。

「乗らないと思いますけどねえ、日番谷サンは」

アタシの言葉に夏梨サンは、ちゃぶ台に置いた手をぐっと握り締め
たまま、無言。

「……アイツはいつもクールぶってるけど、本当は優しい奴なん
だ。自分が何とかできることなら、放っておくはずがねえ」
チッ、とジン太が舌打ちをしてソッポを向いています。
でも、否定はしないんですねエ。

でもね。

アタシが言いたいののは、そういうことじゃないですよ。
そう思いながら手に取ったのは、ちゃぶ台の上に放り出してあった
煙草とジッポライター。

「例えば、この煙草に、火をつけるとしましょう。どーやります？」
一本引き抜いて、ん？ という顔を並べた二人の子供達に示して。

「どうって、そのライターで火イつけりゃいいじゃん」

「つけてみてください」

ジン太は怪訝そうな顔で、ライターと煙草を受け取るとひねくり回
しています。

「こんなカンタンだろ」

ジッポライターに何とか火を点すと、ぎこちない手つきで煙草に火
を近づけてます、が。

あーあー。それじゃ……

「なんでつかねーんだよー!!」

右手に煙草の端をつまんだまま、燃え口に炎を近づけてますが、こ
れじゃ火がつくはずない。

「それだけじゃ、火はつかないんだよ、ジン太」

スッ、とジン太の手から煙草とライターを奪い取ると、アタシはその煙草を口にくわえ、ライターの炎を近づけました。

ジジ……

音を立てて火がついた煙草を見て、二人が目を丸くしてます。やっぱり、子供ですねエ。

「火だけじゃダメなんだ。誰かが炎を近づけると同時に、煙草を銜えた人が息を吸い込む。そうしなきゃ、火はつかないんですよ」
はあ？ という顔をしたジン太と、ハッ、とした夏梨サンの表情が実に対照的です。

「火が消えてしまった人に、もう一度火を点すにはどうするか。火だけではダメなんです。

本人が、何か行動をしないことにはね。誰でも火を近づけられる訳じゃない上、タイミングも重要だ。

日番谷サンならすぐ気づくでしょうね。自分が『火』にはなりえないことを」

「友達とか、家族とか。そういう、ずっと隣にいてやれる人のことだろ」

しばらく沈黙していた夏梨サンは、しばらく俯いた後、そうつぶやきました。

「……いい回答ですね」

「じゃあ、そんな人が誰もいない奴は、どうしたらいいんだよ」
それも、悲しいかな事実です。

そんな人が回りにいたら、誰も死ななくていいでしょう。
だからこそ、自殺はなくならない。

「……やっぱり、冬獅郎に会わしてやりたい」

こういう時には最も似つかわしくない死神に、賭けますか。
アタシは、煙草を指に挟むと、ふーっ、と息を吐きました。

「死神がいるのは、ソウル・ソサエティ。ひとことで言えば、『あの世』です。

現世とソウル・ソサエティの二つの世界を行き来できるのは、正規の死神だけなんです。

アタシもあなたのお兄さんも、正式な死神ではない。だから、こちらから連絡を取れないんですよ」

アタシが、夏梨サンに教えてあげられるのは、この辺が限界です。

「次に霊圧感じたら、すぐ伝えますよ」

アタシがそう続けると、夏梨サンはちよつと元気を取り戻したように、ウン、とうなずきました。

本当に、辻村サンの為だけですか？

それを聞くほど、アタシも野暮じゃないですけどね。

ジン太と夏梨サンが連れ立って出て行った後。

アタシは、チラリ、と縁側に目をやりました。

「聞いてたんでしょ？ 夜一サン」

返事の代わりに聞こえてきたのは、くぁ、という小さな欠伸。

「確かに、アタシも黒崎サンもソウル・ソサエティには行けない。でも、アナタなら可能ですよね？」

「まあ、の」

気持ちよさそうに大きく背伸びして現れたのは、小さな黒猫。

アタシが撫でようと手を伸ばすと、ちゃいちゃい、と小さな手で払いのけます。

ツメをすっかり出してくるなんて、夜一サンらしいっすね。

「ムダじゃの」

乾いた声で言うど、夜一サンはその琥珀の目で、アタシを見上げました。

「二重の意味でムダじゃ。日番谷は動かん。それに、動いたとしても自殺なんぞ止められん。

死神のお品書きには、生きた人間のカウンセリングや自殺阻止なんぞ書いてない」

そりゃま、その通りですがね。

「夏梨サンもそれは分かってる。でもそれでも、ヒトは放っておけないんですよ、そういうことを」

ヒトは、面白いものです。

それが、百年も昔にソウル・ソサエティを追い出されたアタシが、人間界を離れない理由。

「かわいい子たちのために、ちょっと一肌脱いで見たらどうですか？アタシの言葉に、夜一サンはまた、欠伸びながらうなずきました。

「たまには、あの仏頂面を拝むのも、悪くはないかのう」

5. 十番隊舎隊首席前

「で」

日番谷冬獅郎は、書類を百枚増やされたような仏頂面で、儂^{わし}を見上げた。

場所は十番隊隊首室、隊首机のまん前。もちろん、ソウル・ソサエティじゃ。

「俺に何をしろってんだ、四楓院夜一」

質問してきた割に、「話はこれで終わりだ!!」といわんばかりに、書類に視線を戻す。

トン、トン、と手早い動きで判子^{ハンコ}をつくのを、ほう、と感心して眺める。

はつきり言って、隊長時代の儂の十倍は、仕事が早い。

仕事熱心だという噂は、本当だったようじゃな。

しかし、儂は日番谷の仕事を見物しに来たわけじゃない。

すかさずタン！ と手を書類の上につくと、作業を妨害してみた。

「……」

氷のような視線が儂を射る。

「いいか」

「……」

「所詮、この世は男と女じゃ」

日番谷は、返事の代わりに、更に書類を千枚足されたような顔をした。

「女をその気にさせたからには、お主も責任を取らなければの」

判子を持つ日番谷の手が一瞬空中をさまよい、書類の真ん中にトン、と落ちた。

見事な達筆で書かれた字の真上を、赤い跡が汚す。

明らかにそれはミスじゃろ。

日番谷は、己のしでかした失敗を無表情で見下ろした。

そして、コッ、と小さな音を立てて、判子を机の上に休める。

すうつ、と息を吸い込む音が聞こえた。

まるで毛を逆立てようとしている、ネコみたいじゃな。

儂は自分を棚にあげて、そんなことを思った。

次の瞬間、キレて怒鳴るつもりだったのか、抜刀でもするつもりだったのかは判らぬ。

「あっははははは！！」

突然タガが外れたかのように、ソファァで爆睡していたはずの松本乱菊が笑い出したからじゃ。

その姿は、ソファァの背もたれの陰になって見えぬ。

「よくそんなに笑えるもんじゃのー」

儂は感心した。

なかなかどうして、起き抜けに大口開けて大声で笑えるもんじゃない。

しかし儂の一言は、日番谷の我慢の糸をブチッと切ったらしかった。

日番谷は、無言で文鎮を手に取り、ひょい、とソファァの向こうに投げた。

「はははうっ！？」

笑いが、妙な具合に断ち切れる。

しーん……周囲が静まり返った。

「ハナシは聞きました」

急に普通の声を取り戻した乱菊が、バネ仕掛けの人形のようにソファーの上に起き上がった。

その額には、さきほどの文鎮が直撃した、赤く丸い跡がついている。

「自殺する人間を止めるなんて、死神がやっちゃダメでしょ。」

中途半端に助けようとして、突き飛ばされて逆に落ちて、しかも惚れられるなんて……プツははは！ ウケる！！」

日番谷が机の上で、更に投げるものを探している。

「とにかく！」

儂は、どつき漫才を見に来たわけじゃない。

「儂がお主に頼みたいのはひとつじゃ。義骸で現世へ来て、その少女の話を聞いてやるだけじゃ。簡単じゃろ」

「ぎ……義骸」

一番引つかかるのはそこなのか？ と突っ込みたくなるような文句をこぼし、日番谷はしばし考え込んだ。

当然来るだろうと思われた、面倒くさいだの関係ないだの、そんなグチは出なかった。

というよりも、別のことを考え込んでいるように見える。

「……で？」

「『で』てなんじゃ。短すぎて分からんぞ」

「だから。それに何の意味があるんだ。百歩譲って、俺が人間に化けて現世に行ったとする。

一億歩譲って、甘い言葉のひとつやふたつかけてやったとする。で？ それでどーすんだ」

一億歩も譲らねば、甘い言葉ひとつ吐けんのか、コイツは。

「甘い言葉なんて吐けるんですか、隊長？」

「黙れ松本。とにかく俺はやらねえぞ。そんな無意味なこと」
不機嫌さを露にそれだけ言い放つと、また書類に没頭しだす。

「ダメですよ夜一サン。隊長、絶対義骸に入ったりなんかしませんよ」

儂の耳元に、乱菊が耳打ちする。

「義骸、花粉アレルギーなんです。こないだ、それはもうヒドイ目に……だからこんなに嫌がるんです。全くもう子供っぽ……」
バーン！ 返事の変わりに、机が叩かれた。

「寝た切りのためーに、言われたくねえ！」

「寝た切り……」

固まった乱菊を尻目に、立ち上がった日番谷が儂と向かい合った。

「やる気はないか」

まあ、そう返すだろうとは思ってはいたがな。

日番谷は、儂の前に指を二本突きつけた。

「ひとつ。それは死神の仕事じゃねえ。ふたつ。そんなことは不可能だ。

自殺を止めたいなら、柱にでも縛っとけ。それが一番確実だ」

「まあもう」

儂は一步下がると、頭を掻いた。

確かに、予想していた反応ではある。

儂も心中では、日番谷の意見に賛成じゃ。

誰かに生きる力をもらったとか、救われたとか。

そんな物語はほとんどの場合、幻想じゃ。

そんなフワフワしたものに、人は救われたりはせぬ。

自分を救えるのは、結局のところ自分だけなのだから。

ましてや、「死神」という職業はどう**蟲肩目**に見ても、こういうことに向いているとは言えぬ。

自殺を一度止めてもらえただけで、運がよかったと思うべきなのかも知れぬ。

「それでも。お主に惚れたのは、死にたくないという本心の現われなのかも知れぬな」

必死で探していたという、その少女。
ワラをも掴む思いだったのかも知れぬ。

「酔狂が過ぎるんじゃないか？ たかがガキ一人に、何でそんなにこだわる」

日番谷が肩をすくめた。

「たかがガキ一人、のう」

儂は、日番谷の大きな瞳に、鋭い視線を投げ込む。

「本心か？」

ピク、とその目の端が、不快そうに反応する。

「酔狂なのは、一護の妹じゃよ。黒崎夏梨、か」

「……」

返ってきたのは、ため息。

ガシガシ、と頭を掻くと、椅子にドスツと腰を戻した。

「あらー、一護の妹の名前じゃないですか。元気なんですか？」

その場の空気に頓着することなく、乱菊が儂のほうに身を乗り出す。

「ふーむ。あまり元気ではなかったのう」

ちらり、と日番谷を横目で見やりながら、儂は応える。

まあ、嘘じゃない。

めずらしいくらい萎れておったからな。

「ですって。いいんですかあ？ 隊長」

「だから。夏梨だろうがなんだろうが、俺は人間とこれ以上接点持つ気ねえ」

「夏梨、ねえ」

それを聞いた乱菊が、イタズラっぽく笑う。

「隊長が現世の人間を苗字じゃなくて名前で呼ぶの、初めて聞きましたよ？」

「……うっせえよ」

日番谷は噛みつくように言い捨てると、くるりと椅子を回してしまった。

後ろを向かしてしまうと、背もたれに隠されて日番谷は見えなくなってしまう。

「まあよい。儂は浦原との約束は果たしたぞ。動こうが動くまいが、あとはおぬしの自由じゃ」

儂はニヤリと笑うと、日番谷に背を向けた。

6. 最もアブナイ再会劇

深夜。

私は、人っ子一人いない道を、ひとり彷徨っていた。

こんなに歩いてるのに、どこにもたどり着けない。

どこに行こうとしているのかも判らない。

死に場所を、探しているのかもしれない。

——「……辻村、さん」

私が悩みをぶつけた後、真面目な顔で私を見返した、黒崎さんの瞳を思い出していた。

実は、ずっと前から、黒崎さんのことは知っていた。

憧れていたんだ。

誰も苛めなくて、苛められもしなくて、それでも皆とうまくやっていけるあの子に。

あんなふうになりたいって、ずっと思ってた。

だから、声をかけられた時には、なんで私なんかって思ったけど、嬉しかったんだ。

取り留めのない私の話を、黒崎さんは黙って聞いてくれた。

こんな話聞かされて退屈じゃないの？　って黒崎さんを伺うたび、真摯な黒い瞳とぶつかった。

大丈夫だよ、て言われてる気がして。

話してると不思議なくらい、自分の今の状況が客観的にわかった。半年前のある日、桐原さん……昨日あたしのゲタ箱に悪口を書きつけた子が、唐突に冷たくなったこと。そこには、何の前兆もなかったこと。

一人、また一人と冷たくなって、声をかけづらくなるうちに、ついにクラスの誰もが私を無視するようになったこと。その間、わずか2週間もなかったと思う。私にとっては、理由もわからない災害みたいだった。

「私、何がいけなかったのかな……ダメなところがあるなら、直すし。誰かに嫌な思いさせたなら、謝りたいのに」
しゃべり疲れた私は、最後にぼつん、とそれだけつぶやいて、黙った。

「……うーん」

しばらく黒崎さんは黙ってたけど、そのうち頭をかいだ。

「正直言って、全然分かんないよ。辻村さんをイジめる奴の理由なんて……案外、理由なんてないんじゃないの？」

「でも！ それだったら、なんで私が……」

理由があるから、直せるんじゃない。

理由がないなんて言われたら、余計救いがない。

「……黒崎さんは、いいなあ。私みたいな悩み、持ったことないんだろうな」

独り言みたいにつぶやいた私の言葉に、黒崎さんはしばらく黙ったままだった。

「あるよ」

不意に言い放たれた言葉に、私は我に返った。

「お母さんが、死んじゃったときに、ね」

「……え？」

私は、とっさに何の反応も返せなかった。

お母さんを亡くした子、なんて私の周りには一人もいなかったから。

「で、でも。黒崎さん家、お医者さんでしょ？ それなのに……」
そこまで言いかけて、私はドキッとして言葉を切った。
それは、言ってはいけない一言だったって思ったから。

「それでも」

黒崎さんは淡々と続けた。

「死んだんだ。あたしがまだほんとに子供だったころ。雨の日の夜に」

悲しそうでもなく、怒るわけでもなく。

その声は、水底に重く沈んだ石を思い出させた。

そこに沈むまで、きつというんな思いがあったんだろうって、思わせるみたいなの。

「雨の日の夜」死ぬっていうことが、マトモな死に方ではないらしいことは、言葉の雰囲気でも私にもわかった。

そしてそれ以上、決して聞いちゃいけないことなんだってことも。

「みんな当たり前みたいにお母さんがいるのに、あたしにはいなくて。悲しかった。

あたしが悪い子だから、神様がお母さんを取り上げちゃったんだって、思った時もあったよ」

「そんなことないよ！」

私の言葉に、黒崎さんは少しだけ、口元に微笑を浮かべて……そして、頷いた。

それは、妙に大人びて見えた。

「誰のせいでも、ないんだよねあ」

ぽん、と空に放り投げるように。黒崎さんは夕焼け空を見上げて、そう言った。

「それでも、なんで自分だけがって思うようなコトって、勝手に降って来るんだよな。」

腹も立つし、悲しいけど。それでも、その時どうするかだけは、自分で決められるんだ。

受け入れるか、逃げるか、戦うか。それなら、あたしは――」

最後に、黒崎さんが言った言葉を、私は小さく口ずさんでみる。

「あたしは、戦いたい」

私は、夜空に浮かぶ満月を見上げて、足を止めた。

私はいつだって結局、何で自分だけって思うようなことがあれば、自分のせいだって思ってきた。

だから、何か起こっても我慢して、押し殺して、ただ嵐が過ぎるのをじっと待っていた。

いつか誰かが私の誠意に気づいて、受け入れてくれるのを夢見て。それ以外の選択肢なんて……「戦う」なんて、考えたことも、なかった。

「黒崎さん、強いね……」

黒崎さんなら、絶対にできるだろう。

でも、私には……絶対に、できないんだ。

その時だった。

ひゅう、と季節に似合わない冷たい風が、私の頬を吹きぬけていった。

「……？」

思わず、頬に手をやる。

「……見つけた」

びくっ、と顔を上げた。

その声は、ありえないくらいに高いところから聞こえてきたから。

見上げた先で、銀色の逆立った髪が、月光に輝いた。

「……あ」

私は、頬に重ねていた手を、口元へ持っていた。

満月を背景にして、その男の子は、ビルよりも高いところに「浮かんでいた」。

月光の影になって顔はわからないけど、上下とも黒い着物をまとっていた。

そして、右肩からは、刀の鞘みたいなものが突き出していた。

「浮いて……る」

ふわり、とこっちに舞い降りてきたその姿に、私の体はガタガタと震えだした。

自殺しようとしているときも、ここまで震えはしなかった。

何かのトリックじゃない。一目でわかるほど、その動きは滑らかだったから。

「お前だったか？ 俺に用があるのは」

翡翠色の、綺麗な色の瞳が、私の前でひた、と止まる。

それと同時に、私はへたり、と地面に座り込んだ。

「き、みは……」

体だけじゃない、声も自分じゃないみたいに震えてる。

夜風にあおられて、黒い裾が銀色の髪が、揺れる。

でもまったく微動だにしない翡翠の瞳が、私の全身を捉えた。

私は、動けない。

間違いない。

それは、私がとっさに、突き落とした男の子。

そして、私が生まれて初めて、心を奪われた男の子。

「俺か？ 俺は……」

私から50センチくらいしか離れていない場所まで降りる。

そのつま先が、アスファルトの地面につくかつかないかで、止まる。至近距離から見つめられて、私の胸がドキリと高鳴る。

「死神だよ」

「しにが、み……？」

「この世の者じゃないんだ」

射すくめられたみたいに、声がでてこない。

その黒い着物のまわりは、よく見るとぼんやりした燐光を放っていた。

私を見つめる瞳に、吸い込まれそう……

私はこんなに碧くて、こんなに底の见えない色を生まれて初めて見た。

「……死にたいか？」

不意に問いかけられ、私は我に返った。

「俺は死神だ。応えられるのは、その願いだけだ」

「……。死にたい、です……」

気づけば、かすれた声で、そう返していた。

連れて行って欲しい。ここではない、どこかへ。

私の返事に、その男の子……死神、は。

「わかった」

感情をいっさい表さない瞳で、頷く。

「あと、24時間だ」

「え……？」

私は、夢を見ているようにぼんやりしながら、つぶやく。

「24時間やる。この世に、さよならを告げる時間だ。

ちょうど1日たったら、ここへ戻って来い。そしたら、連れて行ってやるよ」

あの世へ。

私の耳元でささやかれる言葉が、甘い誘惑のように通り過ぎてゆく。

びたり、と。

人差し指が、私の顔の前に、宣託でも告げるように、突きつけられた。

「お前は、あと24時間で、死ぬ」

その向こうにある翡翠に、もう逆らえない。

私はひとつ、コクンと頷いた。

7. イジメられっ子の反撃

次の日。

私は何事もなかったかのように、学校への道をとぼとぼと歩いてた。夜更けに出歩いてたせいで、喉が少し痛い。

それが、あれが夢なんかじゃなく、実際に起こったことだと教えてくれる。

私は「死神」に出会った。

その驚きの前に、全ての感情が麻痺してしまったみたいだった。

死神に、「死」を告げられたっていうのに。

私には解放される安堵も、人生を途中下車する寂しさも、浮かんでこなかった。

私だって一応、24時間しかないって言われて、何をしたらいいのか考えた。

でも、考えても考えても、死ぬ前にふさわしいことなんて何も思い浮かばなかった。

こういうとき、特別なことを思いつくような人なら、死にたいなんて思わないんだろうな。

11年生きて、この体の中に、最後にやりたいことを何も詰め込めなかったというなら。

確かに私には、生きる価値なんてないのだろうと思った。

これだけのクラスメートの中にいながら、

誰とも目を合わさず、

誰とも口を利かず、

誰の言葉も耳に入ってこない。

「コドク」って言葉を一シーンにしたならこんなものかって思うよ
うな、一日が始まった。

でも、今日ばかりは、何も思わなかった。

だってもう、最後なんでもん。

もう、明日からは、こんな風にならなくていいもん。

そう思うと、なんだかこんな景色さえ、懐かしいみたいな気分にな
ってくるから不思議だ。

私は教室の壁にかけられた、無機質な白い時計を見た。

午後3時を少し、回ったところだった。

私の24時間が、淡々といつも通りに通り過ぎてゆく。

あと9時間後、私は誰にも知られず、この世からスッと姿を消す。
これでいいんだ。

そう思った。

「……辻村っ、辻村！」

担任の先生の声に、私は我に返る。

辺りを見回すと、みんなの視線が私に集中してて……私は動揺した。

「来週のパレーボールのチーム分けだ。お前、どこのチームに入る
？」

気がつけば、ホームルームの時間になっていたらしい。

私は、今日が覚めたみたいに、教室中を見回した。

「あんた、入れてやりなよ」

「やだー、そっちこそ入れてやればいいでしょ」
くすくす……と、漣のように声が起る。

不思議だ、って思う。

今日死ぬっていう現実より、こんな言葉のほうが痛く胸に突き刺さるなんて。

サアッ、と胸が冷たくなってゆく。

涙も出ないような乾いた気持ちだが、押し寄せてくる。

ガタ、と椅子を後ろに引いて立ち上がってみたけれど、体が別人のように強張ってた。

救いを求めるように見渡しても、周りがみんな壁のように見えて。どこのチームも、私を入れてくれそうなどころはなかった。

「先生、辻村はどこにも入りたくないって」

ひととき大きな声がして、回りがドツと笑い出した。

すらりと伸びた手足。栗色の長い髪。

お嬢様風の外見の中で、切れ長の瞳が気の強さを物語っている。

桐原知美。

勉強もスポーツもできて、パツと派手なかわいさがある子。

私なんかよりも、比べ物にならないくらい「上」の女の子だ。

ひとときわ、目立つくらい字も綺麗だった。

ロッカーの名前に書かれた悪口を見て、一目で誰の筆跡か分かるくらいに。

私は目を伏せ、座ろうとそのまま椅子を引いた。

ずっと、こうやってやり過ごしてきた方法で、受け流そうとしていた。

あんなに自信たっぷりな態度で見下されたら、もう何もいえないくなる。

——「どうしてなの？」

口元まで出掛かった問いは、唇を噛むと同時に押し殺した。

どうして、私だけこんな目に遭うのか。

知りたくても、それをこの空気の中で聞くなんて、できるはずないじゃない。

——「理由なんて、ねーんじゃねえの？」

黒崎さんの言葉が、胸を通り過ぎてゆく。

じゃあ、私はないかもしれない理由のために、死を選ぼうとしているのかな。

滑稽だ。

皆笑うに違いない。……私以外は。

心の中に、乾いた笑みが途切れ途切れに弾け、消えていった。

黙って、椅子に座ろうとした時だった。

翡翠の瞳が私の脳裏に、閃きのようによみがえった。

——「お前は、あと24時間で、死ぬ」

私は全ての動きを止めた。

「……なによ、辻村。何見てんのよ」

気がつけば、私は中途半端に腰を下ろした姿勢のまま、桐原さんを見つめていた、らしい。

そうか。

私は死ぬんだ。

イジメられるのも、桐原さんと口を利くのも、もうこれで最後なんだ。

顔色を伺おうと、伺うまいと、もう結末は変わらない。

どうしたいの？

おそらく生まれて初めて、私はそれを自分に問うた。
心臓が、ドンドンと胸をノックする。

受け入れるのか。逃げるのか。戦うのか。
それを決めるのは、自分自身だ。

昨日聞いたばかりの、黒崎さんの言葉がフラッシュバックする。
「わ、私は……」
どうするのよ？

椅子の背もたれを掴んでいた手を、ぎゅっと握り締める。
うつろだった瞳を、桐原さんに据える。

「なによ！」

桐原さんが一歩、後ろに下がった。
それを見た途端……

「うあああああ！」

絶叫と共に、私は駆けつけた。

広く冷たく感じた桐原さんとの距離は、全力で走ればわずか数歩だった。

「ああああ！」

気が違ったかのような私の大声に、みんなはぎょっとして棒立ちになる。

「私は……」

ぜえ、と一度息を吸い込む。

「私は、戦いたいよお！」

「え……きゃあ！ やめて!!」

桐原さんの綺麗な顔が、別人みたいに歪む。

その顔面に向かって私は、気づけば全力でパンチを叩き込んでいた。

ガタン！

悲鳴と、机が倒される音が教室いっぱい広がる。

「痛い！ 痛い!!」

顔を押さえ、鼻血を出しながら、桐原さんは後ろへ下がった。

スカートが肌蹴てパンツが見えてるのに、それにも気づかないみたいな必死の顔。

私がさらに近づくと、

「いや……やめて!!」

悲鳴を上げる。

「……」

それを見て、すうつ、と私の中の怒りが引いてゆく。

「辻村っ！」

先生が、啞然とした表情のまま、こちらに歩いてくる。

私は、先生の手を振り払うと、一目散に教室の外に駆け出した。

8. 「いめんね」「ありがとう」

はあ、はあ、と息が切れる。

こんなに走ったのは、久しぶり。

誰も追いかけてきてないのに気づいて、私は土手に降りる。

バン、と背中を芝生に打ちつけて空を見やると、思いがけず優しい青が広がっていた。

「ものすごいこと、しちゃったな……」

先生の目の前で、他の生徒を殴るなんて。

死神さんが言ってた「さよならする」っていうのは、こういう意味じゃなかったはずなのに。

いきなり気が狂ったみたいになめき散らして、殴りかかるなんて、周りはどう思っただろう。

取り返しのつかないことをした、って思いながらも、心はスツキリしてた。

どれくらい、経っただろう。

汗も引いて、背中がひんやりと冷たくなってきたころ。

不意に、私の横に誰かが腰を下ろした。

「……苑子」

それは、私の隣の席のクラスメイト。半年前までの、私の友達。

苑子は、土手に三角座りして、緊張した面持ちで、流れる川面を見ている。

「教室、どうなってるの？」

沈黙に耐えられなくなって、私は思い切って尋ねた。

「ホームルームよ」

なんだ。私があんな騒動起こしたのに、何も変わってないんだ。

「誠子へのイジメについて。先生が皆を立たせて、一人ひとり名前を呼んで怒ったの」

「え？」

私は思わず、上半身を起こす。

「先生、知ってたの？」

「当たり前じゃない」

苑子。ひさしぶりに視線を合わせた彼女の顔は、悲しそうだった。

「誰だって見てれば分かるよ。どんなに誠子が辛い目にあってたか。何とかしたい、何とかしなきゃって毎日毎日思ってたんだよ」
見て……くれてたんだ。

私の肩から、力が抜ける。

「あたし、何もできなくて。弱くてごめんね」
びっくりして顔を上げると、苑子の何だか泣き出しそうな表情が目に入って、慌てて首を振る。

そんな言葉を口にされるとは夢にも思わなかった。川の音以外は、しばらく何も聞こえない。

「……どうして？」

私は、ごくり、と一度唾をのみこんでから、再び口を開いた。

「どうして、みんな私をイジメたの？」

聞くのが、怖いと思ってた。それを聞くくらいなら、死んだほうがマシだって。

でも、どんなひどいこと言われても、落ち込む時間は今日の夜中まで。

それでも、私の心臓は高く、強く高鳴ってた。

―― ああ。生きてる……

でも。

苑子の言葉は、私が想像したどんな言葉とも、違っていた。

「誠子、かわいいから」

「……え？ 嘘……」

それは、本当に夢の夢にも思っていない言葉。

苑子は、信じていない私の表情を見ると、ランドセルからケータイを取り出した。

「見て、この写真」

見せられた画面を、私は覗き込む。

そこには、苑子の隣で明るく笑う、半年前の私が写っていた。

前髪は今より5センチは短くて、表情にもぜんぜん影なんてない。

「この写真を見てね。隣のクラスの男の子が、この写真欲しいって、何度も言ってきたの。」

でもね、その男の子、桐原さんが好きな子だったんだよ。桐原さんプライド高いし、悔しかったんじゃないかな。

それがきっかけで、どんどんエスカレートして……」

「そ、んな……そんなこと？」

そんなこと？ とっさに、次の言葉が接げなかった。

「ご、ごめん。ごめんね!？」

そんなどうでもいいことで苛めたのか。

私が責めてると思ったんだろう、苑子は何度も私に頭を下げた。

でも、私は正直、怒るところじゃなかったんだ。

本当に、「そんなこと」なの？

私が、何かとんでもない失敗をしたからじゃ、ないの？

「本当にごめんね。私も、誠子に声かけてあげられなくて」

「……」

「誠子……」

私を見上げる苑子の目に、涙がたまっている。

それを見て、ふと私は、悲しい気持ちが胸にこみ上げてくるのを感じた。

ごめんね。

自分がいなくなることに対して。

初めて、誰かに謝りたいと思った。

「明日から、もしも他の子が誠子を見捨てても、私は一緒にいるからね」

「でも……!」

それは、本当に勇気がいること。

自分も一緒に苛めてください、って言ってるようなもののなのに。

―― 明日なんてないの。

そう言おうとしたけど、言えるはずもなかった。

言葉を失う私の前で、苑子は笑った。

半年前のように。

「誠子を見てて、私も勇気ださなきゃって思ったの。あの時かっこよかったよ、誠子」

少しずつ、頭が混乱してゆく。何がダメで、何が良くて。何がかっこよくて、何がみつともないのか。

今まで当たり前だと思っていたことが、壊れてゆく。

「ただいま」

家にたどり着くと、玄関にローファアを脱ぎ捨てる。廊下に差し込んだ長い影に、私は顔を上げた。

「お母さん……」

久しぶりにまともに見るお母さんの顔は、まるで能面みたいに表情がなかった。

「学校から電話来たわよ。桐原さんっていうクラスメートを……殴ったって、本当？」

背中がさあつ、と冷たくなる。こんなに早く家にまで伝わるなんて、考えてなかったから。

「どうしてなの！ あんたはそんなことしない、いい子だと思ってたのに……！」

深く俯いた私の手を、お母さんが手荒く取った。

「今すぐお母さんと学校に行くのよ！ 桐原さんに謝るの」

「……嫌」

「誠子っ！」

ほっという、とか。お母さんに私の気持ちなんて分かるはずないでしょ、とか。

はねつける言葉が頭に浮かんでは、消えた。私は、鞆の中に手を突っ込む。

そして、小さな紙切れをお母さんに向って突き出した。

「それ、私のロッカーの名札。それが、桐原さんの字」

キモい、ブサイク、学校来んな。

そう書かれた名札を、お母さんは凝視した。私は、ぎゅっと拳を握

りしめる。

「私、ここまで言われなきゃいけないほどダメな人間じゃないよね？　だから、抵抗したの」

絶対にムリだと思っていたのに。やってみたら、それは本当に拍子抜けするくらいに簡単だった。

私は、戦ったんだ。黒崎さんが言ったように。

私が今晚死んだとして、どんな形で発見されるのかは分からない。

でも、「クラスメートに苛められて辛かったから自殺した」なんて、死んだ後になって言われたくなかったんだ。

私が死んだ後に誰かを怨むんじゃ、あまりにお父さんやお母さんがかわいそうだから。

「……誠子」

手が伸ばされ、私は思わず身をすくめた。また引っ張られるか、叩かれるかと思った。

でも、予想していた衝撃の代わりに体を覆ったのは、久しく感じたことのないぬくもりだった。

「誠子はダメな子なんかじゃないよ。謝る必要なんてないから、ここにいなさい。」

お母さんは、何があっても誠子の味方だからね」

ああ、と私は息をついた。

なんだかこんな風に深く息をつくのは、随分久しぶりに思えた。ためらってから、お母さんの背中に手をまわす。

こんなにひとがあたたかいなんて。人の冷たさを知るまで、分からなかったよ。

私はお母さんに抱きつき……本当に久しぶりに、声の限りに泣いた。

小さな金属の音を響かせ、私はハサミを机の上に置いた。

机に散った髪を集め、ゴミ箱に捨てる。半年振りに、前髪を切った。今は、眉毛に少しかかるくらいにしている。毛羽立っていた髪も、滑らかな手触りになるまで櫛で梳かした。

「……行こう」

鏡の中の私につぶやくと、椅子を引いて立ち上がる。足音をひそめて階段から下へ降りた。

明かりがついている台所からそっと中を覗き込むと、テーブルに突っ伏したお母さんの背中が見えた。

規則正しく肩が動いてるから、今日も深夜残業のお父さんを待っている間に、寝ちゃったんだろう。

忍び足で近づいて見下ろして、まじまじとその顔を見下ろす。

そして、こんなに皺があっただって驚いた。

せり上げてきた切なさをごまかすように、私は隣の椅子の背からカーディガンを取ると、ゆっくりとそれを背中に着せ掛ける。

「大好きだよ、お母さん。……ありがとう」

心は、もう決まっている。今更迷うことなんてない。私はそのまま、夜の街へと滑り出した。

時刻は深夜、十一時。命は、残り一時間。

9. 誠子の告白、夏梨の独白

ふんふーん。

あたしは湯船に浸かって、鼻歌を歌っていた。

たっぷりの熱い湯に肩まで浸かって、足だけバスタブの上に乗って湯から出している。

入り方がオヤジ臭いって誰かに言われたことがあるけど、一日の終わりはやっぱり熱い風呂だろ。

鼻歌が、ついにサビまで達した時だった。

「夏梨！　おーい夏梨。電話だぞ！」

「んー？　こっち。風呂だよ！！」

一兄イチニイの声に、あたしはハナウタを中断して声を上げる。

カラリ、と風呂の戸が少しだけ開けられて、そこからケータイが差し込まれた。

「ん？　これ一兄のケータイじゃん」

「お前に代わってくれてよ」

誰が。そういう前に、一兄は戸を閉めて、出て行ってしまった。

妹の風呂に照れるなんて、兄としてどーよ。

そう思いながら、ケータイの接受面を見ると、そこには「ゲタ男」とだけ記されていた。

「もしもし。ゲタ男か？」

「ゲタ男とはひどいですねー、夏梨サン」

「……なんだ、あんたか」

聞こえてきたのは間違いない浦原さんの声。
てゆうか一兄、ちゃんと名前いれとけよ。

「日番谷サン、今現世に来てますよ」

「ホントか!？」

あたしは、聞くが早いか、風呂場の戸をあけて、バン！ と脱衣場に飛び出した。

「どこだよ？」

脱いだばかりのジーンズに足を突っ込み、あたしはケータイに向かって怒鳴る。

「お、おい夏梨、どこ行くんだよ！」

適当に服を着て、髪から水を滴らせたまま風呂場から出てきたあたしを見て、一兄が驚いて振り返る。

「怪しいところじゃねーよ。浦原商店！」

パシッ、とケータイを一兄に渡して、あたしは足早にダイニングを通り過ぎる。

「浦原商店って、怪しすぎるだろ！」

「……。すぐ戻るって！」

浦原商店は出したのはマズかったか。

あたしは後を追ってこようとした一兄を振り切り、外へと飛び出した。

えーと。空座中の近くだったよな……

浦原さんの言葉を思い出しながら、息を切らせて走り抜ける。

――「なーんか、妙な具合なんですけどね」

浦原さんは、電話の中で本当に不思議そうに言ってた。

――「義骸じゃなく、わざわざ死神姿でのご降臨のようです。ただ、戦闘の様子はまるでなし、高い霊圧も付近にはない。

同じ場所にじっとしているようだから、今すぐ向かえば間に合うかもしれないよ」

誰かを待っているんですかねえ。

浦原さんが最後に言っていた言葉が、耳に残っていた。

「何、やってんだ。冬獅郎のヤツ……」

空座中学の校門を曲がった時だった。

夢にも考えていなかった声に、呼び止められたのは。

「黒崎さん？」

辻村さん？

振り返ったのと、街路灯に照らされた辻村さんを見つけたのは同時だった。

――「雰囲気違う。なんか……」

それが、前髪を切って、こざっぱりした格好をしているからとすぐ気づく。

それだけじゃなく、目の前の辻村さんは、何か憑き物が落ちたみたいにしっくりして見えた。

「なんで、こんな処に……？」

あたし達は同時に相手に呼びかけた。

そして、お互いに気まずく黙り込む。

あたしには言いづらい事情があるからだけど、辻村さんも負けず劣らず事情がありそうだった。

辻村さんは少し困ったみたいで、首をかしげた。
何度か言おうとして口を開いて、そしてまた閉じる。

「信じてくれないと思うけど……黒崎さんには、言うね」
その瞬間、いろんな「理由」をあたしは想像したけど。

「死神に、会いに来たの」

あたしと同じ理由を口にされるとだけは、夢にも思っていなかった。

「……でね。もうすぐ、私を連れに来る死神さんとの待ち合わせの時間なの」

辻村さんが言葉を止めても、あたしはしばらく微動だに出来ずにいた。

それを見て、あたしが疑ってると思ったのか、辻村さんは焦ったように向き直る。

「信じるわけないよね？ 死神なんて……でも、あたしは確かに」
「いい」

あたしは、辻村さんの言葉を途中で遮った。

低い声にビクリしたのか、辻村さんが言葉をとめて、あたしを見返してくる。

信じねえのは、死神がいることなんかじゃねえ。

あたしが信じられねえのは、信じたくないのは、そんなことじゃねえ。

「その、辻村さんを連れて行くって言ったやつ。本当に、銀髪で青い目で、黒づくめの着物を着たやつだったのか？」

自分の声の温度が、どんどん冷えてゆく。

「ええ」

辻村さんは、確かに一度、はっきりと頷いた。

間違いない。そいつは、冬獅郎だ。

でも……なんで？

なんでアイツが、辻村さんを連れにくるんだ？

「あたしにも、知り合いいるって、言ったよな。銀髪で青い目の男の子」

「え？ うん……」

「あたしも言い忘れてたことがある。そいつは……『死神』なんだ」
辻村さんが、はじめたようにあたしを見上げる。

「それじゃあ……」

「見損なったぜ」

あたしは吐き捨てると、夜空を見上げた。

確かにあたしは、辻村さんに会ってくれて頼むつもりで、冬獅郎を探してた。

でも、こんな結末なんて夢にも望んでなかった。

確かに辻村さんは悩み苦しんでいた。でも、長い前髪の方こうに見えたあの目は諦めてなかったし、今でもそうだ。

大体、死ぬと決めた奴なら、あんな風に悩んだりはしない。

悩んでいたのは、それを打ち明けてくれたのは、心の底では生きたいと願っていたからだろ。

あたしが冬獅郎と辻村さんを合わせたかったのは、
あいつなら絶対に辻村さんの願いを見過ごすことはないと思ってい

たから。

難しいことだけど、生きる方向へと導いてくれると疑わなかったからだ。

「……許せねえ」

「え？」

あたしの氷点下にまで下がった声に、辻村さんが顔を傾ける。

「出て来い冬獅郎！！ いるんだろっ！」

びくっ、とする辻村さんから視線を逸らし、あたしは上空を見て怒鳴った。

「……お前には、会わねえつもりだったのにな」

返してきたのは、予想してた……けど、今は聞きたくなかった声。

声のほうを見ると、電信柱の上に佇んだ、人影が目に入った。

電信柱の天辺には、つま先がかすかに触れている程度。半ば宙に浮いている。

月光に照らされた銀髪の死神は、確かにこの世のものには見えなかった。

「いいから！ 言いたいことがある、降りて来い！」

あたしが怒鳴ると、冬獅郎は少しだけ、肩をすくめたみたいだった。全く持って、ムカつくほど、いつもと態度がかわらねえ。

あたしが、これほど激怒してるのは分かっているはずなのに。

葉が舞い落ちるような滑らかな動きで、冬獅郎が地面に飛び降りる。あたしはその姿を確認するなり、衝動的な怒りに任せて駆け寄った。

黒崎さん！

辻村さんの悲鳴が聞こえる。

それを耳の端に聞きながら……あたしは拳を振り上げた。

バシッ！！

鈍い音を立て、あたしの拳が冬獅郎の頬に食い込んだ。

「ふざけんな！ お前、一体何やってんだ！」

よろめいた冬獅郎の胸倉を掴み、あたしは声の限りに怒鳴った。

「黒崎さん、やめて！！」

あたしの腕に、辻村さんがしがみつく。

「私が頼んだの。死にたいって。私が……！」

「聞いちゃいけない頼みつてのもあるだろ！ お前、殺されるんだぞ！ 二度と戻れないんだぞ！ 分かってんのか！」

「なんで黒崎さんが、怒るの？」

「お前が死ねば、悲しむやつがいっぱいいるからだ！」

数秒の、空白があった。

辻村さんは、あたしの言葉に、痛みをこらえるように固まった。

「死神……さん」

辻村さんは、あたしに殴られた頬を押さえた、冬獅郎に向かって歩み寄った。

「ごめんなさいって、言いに来ました」

頭を、深く深く下げる。

「私、やっぱり……生きていたいです」

えっ？

その言葉に、あたしは我に返る。

怒りがふうっ、と覚めていく。

「あなたに、残された時間は24時間って言われて。最後だと思ってやりたいことを全部やって、気づいたの。

私はいつだって、周りが私にどうしてほしいのかってことばかり考えてた。

自分がどうしたいのかなんて、一度も考えたことがなかったんだって。

私はまだ、ちゃんと生きてない。だからまだ、死にたくない」

辻村さんの言葉が、心に染みてゆく。

昨日あたしが会った辻村さんは、自分を責めて苦しめて、見ていて切ないくらいだった。

辻村さんは、全然悪くないのに。

必要もないのに自分を苦しめるのは止めろって、言いたくなるくらいに。

今でも、その言い方は頼りない。

それでも、火にかけた水がポツ……と粟立った、ひとつめの泡のような。

そんな前兆を感じる。

やがて一粒の弱い泡は、無数の力強い泡へと姿を変えるんだ。

「明日すぐ、幸せになるのはムリだと思う。でも、今日よりはちょっとだけ、いい日にできそうな気がするの」

「……」

あたしの手が、冬獅郎の襟首から離れた。
冬獅郎の顔を、至近距離でまじまじと見る。

こんなにかっこ悪い冬獅郎を、初めて見た。

あたしから目を逸らしたのを一目見て、そう思う。

着物の襟は、片方だけ肌蹴はだけてるし、頬は赤く腫れてるし。

いつつもキツチリ襟を正して、人形みたいに澄ましてる奴と同一人物とは思えない。

……まあ、完璧にあたしのせいなんだけど。

「しょうがねえな」

冬獅郎は、あたしに殴られた頬を拳で軽くぬぐうと、サラリとそう返した。

ふわり、と風が吹きぬける。

冬獅郎の体は、まるで綿みたいに軽やかに、風に乗って宙に浮き上がった。

上空五メートルくらいまで上がった時点で、胡坐をかいてあたし達を見下ろした。

月を背中に行っているせいで、その表情は伺えない。

「その女が邪魔しそうだしな。諦めるしかないか」

「な……」

何を言ってるんデスカ、アナタハ。

開いた口がふさがらないってのは本当なんだ、とあたしは思った。
十番隊隊長。間違いなく、今いる中で最強の死神のひとり。

そんなヤツが、あたしのパンチひとつで逃げるなんて、あるはずねーだろ！

「じゃな」

あたしが二の句を継げずにいる間に、その姿が、少しずつ闇に透けて、薄くなってゆく。

「待って！」

その時、辻村さんが一步、つんのめるように前に出た。

「何だ」

やっぱり、律儀なヤツ。

半ば風景の中に溶けながらも、こちらを見下ろした冬獅郎の視線を感じた。

「伝えたいことがあるの」

その震えてるくせに、決然とした声。

辻村さんの次の言葉を予測できた途端、あたしはなぜか……ドキリとした。

ぎゅっ、と毗を決して、辻村さんは冬獅郎を見上げた。

「私、貴方のこと好きです」

冬獅郎が返したのは、静かなる沈黙。

あたしは関係ないはずなのに、ドキドキと胸が高鳴ってゆく。張り詰めた糸が、二人の間には存在しているみたいだった。

「悪いな。俺には応えられない」

沈黙を破ったのは、落ち着いた冬獅郎の声だった。

あたしは思わず、目を逸らした。

絶対に相容れないふたつの生き物が、真っ向からぶつかってすれ違うのを見たから。

その姿が、完全に消えようとしたとき。

「もう会えないの？」

悲痛な辻村さんの声が響く。

でも……そのときには、冬獅郎の姿は完全に消えていた。

しゅん、と辻村さんが、鼻をすすり上げる音が、静まり返った空間に響いた。

何か言ってやりたい、でもなにも思いつかない。

そう思ったとき。闇から、声が返ってきた。

「80年くらい経って、お前の天寿が尽きたら。その時はまた、俺が迎えに来てやるよ」

「……かつこいいぞ、バカヤロー」

あたしの最後の言葉は、きっと冬獅郎には届かなかったと思う。

それきり、何の反応も、返ってこなかったから。

人間と、死神。

その間には、絶対に超えられない境界線が引かれている。

それを理由にしなかったのは、優しさなのか、冷たさなのか判らないんだ。

あたしには、まだ。

でも、アンタには……

あたしは前に立つ辻村さんを見返す。

アンタにはきつと、伝わったんだね。

くしゅん、と辻村さんは鼻を鳴らすと、指先で涙をぬぐった。

透明な水滴が、月光でキラリと輝いた。

そっか。

「辻」何とかって名前の、モテる女の子がいるって、本当だったんだ。

あたしはその横顔を見て、場違いなことを思う。

「あと80年、か。がんばらなきゃ」

そう言って、くると冬獅郎のいた所に背を向けた辻村さんの笑顔は、ハッとするくらい、キレイに見えたから。

10. カーテンコール

「……」

浦原喜助は、珍しく困っていた。

「あ””……」

目の前のちゃぶ台には、異音を発するオレンジ頭が鎮座している。

「一体どーしたんスカ。黒崎サン？」

顔の前にかざした扇子の向こうから、一護の顔を覗き込む。

だが、ちゃぶ台に顔面をくつつけるようにして頭を抱えている、その表情は見えない。

十分前。

「浦原サンはいるか!!」

声を荒げて浦原商店に乗り込んできた時は、どうなることかと思っ
た。

しかしこの部屋に入り込んで浦原と向かい合った直後から、この有
様なのだ。

悩むなら、お年頃の少年らしくエロ本でも見て悶えて欲しい。
少なくとも、こんな中年親父の顔を見て考え込まないで欲しい。

「あゝつ、と。黒崎サン？」

途端。ガバツ、と一護が起き上がった。

若干怯えた浦原が、身をのけぞらせる。

「あ、あのよ」

「はい？」

何でもいい。こんな妙な沈黙を守るくらいなら、何でもいいから喋って欲しい。

しかし、一護の言葉は、浦原のあらゆる予想を越えたものだった。

「死神と人間の恋愛って、成り立つモンか？」

ああ。

浦原は諒解する。

「ええと。この場合は死神と人間の溝っていうよりかは、黒崎さんと、あのお兄さんの溝の方が深いと思いますよ」

「……あのお兄さんって誰だ」

「え？ 黒崎サンと朽木ルキアさんの話でしょ？」

「な、訳あるかあ！！」

ダン！！と一護がちゃぶ台を踏んづけ、大声を出した。

「違うんスカ？ じゃあ一体、誰と誰の話です？」

「……………うーむ」

再びちゃぶ台の上で頭を抱えてしまった一護を、浦原は途方にくれて見下ろした。

何を言い出すかと思えば、死神と人間の恋愛だなどと。

言うまでもないが、「寿命」というものを持たず、何百年、何千年と生きる死神と、百年足らずしか生きられない人間との恋愛など、成立するはずがない。

浦原が言葉に困った時。

ふあ、と欠伸をしつつ背伸びをした黒猫姿の夜一が、座敷の中に入ってきた。

「おぬしも疎いのう、浦原」

その琥珀色の瞳が、浦原と一護に交互に向けられる。

「日番谷と夏梨の話じゃろ」

「……う」

一護が一瞬顔を上げたが、また伏せた。その耳の先が、真っ赤になっ
っている。

「おぬしも妹のこととなると弱いもう」

一護は苦虫を噛み潰したような、同時に当惑しきったような、なん
とも情けない顔を浦原に向けた。

「浦原サン、昨日の夜あいづらが顔合わせた原因作ったのは、アン
タだろ？」

なるほど。

浦原はやっと合点がいった。

確かに昨日の夜、日番谷の霊圧を見つけて、夏梨に電話で連絡した。
「アンタから電話かかってきた後、夏梨のヤツ浦原商店に行くとか
言って飛び出して行きやがって。

こんな怪しいトコに夜遅く行かせられねえだろ。後追ったんだけど
……」

サラッと、大変失礼なことを言われたのは聞き流すことにする。

ひゅう、と浦原は口笛を吹いた。

「日番谷サンを友達と会わせたいなんて言って。夏梨サンも女です
ねえ」

「ちが……!」

一護がバン、とちゃぶ台を叩く。

「え? だって」

浦原は、近くに来た夜一の胴を両手で掴んで持ち上げると、ぎゅつ
と抱きしめた。

「こーんな感じで。よろしくやってたんじゃないですか?」

バリリ、とその鼻っ柱を夜一が引っかき、爪あとを刻んだ浦原が背

後に沈む。

「……カッコイイって」

ぼそっ、と一護がつぶやいた。

「は??」

浦原と夜一の声が重なる。一護が声を張り上げた。

「だから！ カッコイイって言ってたんだよ、夏梨が！ 冬獅郎のことを!!」

一瞬の間を空けて。

はあああ、とため息をついた二人を見て、一護がちゃぶ台をバンバン叩いた。

「てめーら！ 俺がどれほど心配……！」

「何かと思えば、それだけかあ？」

期待してソンした、という顔で、夜一が一護を流し見た。

「カッコイイだ？ あの位の女子おななら、特撮モノのヒーローから便器の蓋まで、カッコイイと思えばカッコイイくらいは言うじゃろ」

「便器の蓋ってことはないと思いますけどね」

「で！ でもよ！ 兄貴としては心配!!」

「黙れ、このチェリー君が」

夜一の言葉に、一護がとっさに言葉に詰まり……プルプルと震えた。

やれやれ。浦原はため息をつく。

夏梨が出て行った後、おそらく心配した一護は、夏梨の後を追っていったのだろう。

そして、夏梨と日番谷が会っている場所に遭遇した。

どう出て行こうか迷っているうちに、（一護にとっての）問題発言が飛び出して、出るに出られなくなってしまった、というところか。

こう見えて、妹思いの一護のことだ。

この一晩のうちに、余計なことを考えるだけ考えて心配を膨らませ、いたたまれずここにやってきたのだろう。

戦いとなれば、隊長をも上回る戦闘能力を見せるというのに。

妹の恋愛ごとだとも情けないのは、微笑ましいというか何というか。

「本人に聞けば、いいんじゃないですか？」

浦原は、ひょいと窓の外を指差した。

「は？ 本人って……」

「日番谷サン、来てますよ。かすかに霊圧を感じます。場所は空座小学校の、屋上ってところですかね？」

啞然とした一護に、浦原はニヤリ、と笑って見せた。

キーンコーンカーンコーン……

空座小学校に、今日も授業の終わりを告げるチャイムが、響き渡る。いつもどおりの子供達の笑い声が、狭い教室の中ではじける。

「忘れ物だよ」

ランドセルを取り、立ち上がろうとした誠子は、その声に振り返る。そこには、誠子を見下ろして微笑む、苑子の姿があった。

その手には、誠子が机の上に置き忘れていた、ペンケースが握られている。

「う……うん、ありがとう」

誠子は、戸惑いながらも手を伸ばす。

「明日から、誠子と一緒にいる」。苑子のその言葉は本当だった。周りの冷たい視線にもめげず、今日一日、苑子は誠子の隣にいてくれた。

そして桐原知美を始め、他のクラスのメンバーは、誠子がいないように振舞っていた。

先生に何か言われたからって、素直に言うことは聞く気になれない。だからといって、またキレて殴りかかられたら厄介だ。

そう思っているのが、手に取るように判った。

—— まあ、これはこれでしばらくは安心か……

誠子は、わずかに苑子に微笑み返した。

授業も終わり、ほっ、と気が抜けたからかもしれない。

これまで油断なく周りに視線を走らせていた、緊張がほぐれた。

途端。

ヒュッ、と飛んできた何かに、苑子も誠子もとっさに反応できず、立ちすくむ。

それが箒ほうきの柄だ、と気がついたときには、

それは誠子のペンケースを下から強かに叩いていた。

宙を舞うペンケース、弾ける悪意に満ちたクラスメートの笑い声。

「苑子！」

手を押さえた苑子を見た、誠子の表情が歪む。

やっぱり、恐れていたことが起きた。

巻き込んでしまった。

クルクルと回転しながら宙を舞うペンケースを目の端に捉えた時だった。

パシッ、と音を立て、教室の入り口に立った人影が、そのペンケースを掴んだ。

かなりのスピードだったのに、迷いも無い手つきで。

周囲からどよめきが上がる中、その少女はスタスタと教室の中に入ってきた。

その右腕に、サッカーボールを抱えている。

「黒崎さん！」

「よ！ 辻村さん」

屈託のない明るい笑顔に、まぶしいものを見るように誠子は目を細めた。

軽く手を上げて、夏梨は誠子を見下ろすと、ペンケースを手渡す。

「サッカー誘いに来たんだ、アンタも来ないか？」

「えっ？」

誠子と苑子は顔を見合わせる。

くすくす、と周りから笑い声が起こる。

誠子も苑子も、運動神経がいいほうではなかった。

サッカーなど、お世辞にも似合うとはいえないだろう。

「行くわ」

誠子は、気づけばそう口にしていた。

「せ、誠子？」

「行こうよ！」

戸惑う苑子の手を掴み、立ち上がる。

確かに、ちよつとくらい痛い思いするかもしれない。恥ずかしい思いするかもしれない。

でもつい数時間前、死ぬところだったのと比べれば、どうってことないと思えた。

それよりも、これまでの自分だったらできないことをやってみたい。そんな気持ちのほうが強かった。

「早く行こうぜ！！」

廊下から、夏梨の友人たちの声が聞こえる。

ニヤツ、と笑った夏梨が、誠子と苑子の背中を、グイッと押した。その掌はどのクラスメートよりも強引だったけど……温かった。強張っていた誠子を、心から笑わせるほどに。

「……なーによ。いい子ぶっちゃって」

最後に教室に残った夏梨の背中に、桐原知美の尖った声が飛んだ。

ダン！！

次の瞬間、教室の床に打ち付けられたサッカーボールの勢いに、キヤツと小さな悲鳴を上げて後ろに飛びのく。

チラリ、と肩越しに振り返った夏梨の目には、烈しい怒りが燃えていた。

「次、辻村さんをイジメてみる。『殺すぜ』」

その剣幕に、周囲の子供達が絶句する。

辻村誠子は、自分が護る。

それが、あの場に居合わせた自分が、できることだと思った。

何しろ日番谷は死神。どんなに望んでも、傍にいて誠子を見張る訳にはいかないからだ。

そこまで思った夏梨は、廊下に視線を戻そうとして……バツと振り返り、教室の窓の外を見た。

「まさか」

窓から見えるのは、隣の校舎の屋上。

その柵にもたれかかるようにして、一人の少年が立っていた。

陽光に、髪が銀色に輝いている――それを見るなり、夏梨は身を翻した。

はっ、はっ、はっ。

痛む喉を押さえ、全力で非常階段を駆け上がる。

汗が一気に全身から噴出し、頬を伝ってゆく。

早くしないと、早くしないと。アイツはいなくなってしまう。

アイツに、伝えたいことがあるんだ。

言わなくちゃいけないことがある。

ダン、と足音を立て、屋上にたどり着く。
すぐには顔を上げられず、両膝に手について、大きくあえぐことしか出来ない。

ただっ広い屋上の上を、夏の終わりの、心地よい風が吹きぬけてゆく。

はあ。

夏梨は顎に伝った汗をぬぐい、顔を上げた。

そして、柵に背中をもたせ掛けて立った少年を、見返した。

「冬獅郎……」

目の前に立つ日番谷は、死神の姿ではなかった。

黒いノースリーブのシャツを見につけ、ゆるめのジーンズを身につけている。

ポケットには携帯電話のようなものが差し込まれていて、ピンクのストラップが見えていた。

昨日日本気でぶん殴ったというのに、その頬は相変わらず、人形のよう白い。

その大きな翡翠の瞳は、穏やかに凪いでいた。

その冷静さが何故か悔しくて、夏梨は大股で一步踏み出す。

「……誠子の様子を見に来たのか」

その問いかけに返事はない。

しかし、それは夏梨の知る日番谷なら、当然の行動かもしれないと思う。

ちゃんと負けずに暮らせているか、瀨霊廷を抜け出してでも、確か

めたいと思うはずだ。

「心配してたのか、アイツのこと」

「心配してねえよ。お前がいるからな」

言葉をなくした夏梨を見やると、日番谷は柵に手をかけ、柵の上にひよいと腰を下ろした。

眼下は、十メートル以上は高さがあり、中庭が小さく見えている。

頬を撫でる風に、心地よさそうにわずかに目を細めた。

さりげなく漏らされた信頼の言葉。それなのに嬉しくなれないのは、自分自身のせいだ。

「冬獅郎」

夏梨は、日番谷のすぐ足元まで歩いてくると、俯いた。

「なんだよ？」

「あたしを殴れ！」

「……………はあ？」

宙に浮いた両足を揺らせながら、柵に座った日番谷が夏梨の方に身を乗り出した。

「何でそうなるんだ？」

「あたし、お前のことを信用してたつもりだったのに。信用してなかった。あんな風に殴ったりなんかして。あれからずっと凹んだんだ」

「凹むな」

日番谷の返事は、これ以上ないほどに簡潔だった。

「あの状況じゃ、そう思っても無理ねえ」

「でもあたしの気がすまねーんだよ！」

「意味が分からねーな」

日番谷は、夏梨の剣幕に面倒くさそうに視線をそらした。

「お前が俺を殴ったからって、何で俺がやり返さなきゃなんねえんだ」

ああもう、と夏梨は地団太を踏む。

理屈に合わないことなんて分かってる。でも、理屈じゃないんだ、これは。

「なあ！」

夏梨が日番谷に詰めより、その腕を掴む。

「止めろって！」

不安定な柵の上で揺さぶられ、とっさに日番谷が夏梨の肩に手を置いた。

見る人が見れば、抱き合っているように見えただろう。

そして、二人にとって、いや三人にとって不幸なことに、

「お、お前ら……」

それを目撃したのは、駆けつけた黒崎一護だった。

もしも、いや万が一、「そんな場面」を目の当たりにしてしまったら。

兄として、断固として怒るつもりでいた。

日番谷はどうだか知らないが、少なくとも夏梨にはまだ早い。

だが、しかし。

「おっ邪魔しました」

頭を掻いて、その場から退出した一護を、日番谷と夏梨はキョトンとして見送った。

「……」

自分達の、目下の状況を確認する。

「て、おい！ 一兄！！ 待て！！」

初めに反応したのは夏梨だった。

顔を真っ赤に染め、両手をブンブンと振って一護に向き直った。

「違うんだって！ 別にそんなんじゃ……！」

振り返った瞬間、振り回した腕が、日番谷の胸をドン、と突いた。

「ん？」

グラリ、と日番谷の体が揺れる。

なんか、こういうことがつい先日あったような気がする。

「あ！」

振り返った一護が、日番谷を見て慌てて向き直る。

「冬獅郎！」

夏梨も、気づいた。

しかしその時には、日番谷の体は柵を乗り越え、背中から宙に舞っていた。

「また、24時間ごっこでもやる気かよ」

頭を掻いた日番谷は、手を伸ばそうとした夏梨の手を、そっと振り払った。

—— 行っちゃおう……！

このまま、誠子と会った夜のように、ふっと消えてしまうつもりなんだろう。

24時間ごっこ。

日番谷が昨夜残した最後の言葉に、ドキリとした気持ちちがよみがえった。

「あ、あんた！　あたしがいつか死ぬ時も、ちゃんと来てくれるんだろうな！！」

自分があと何十年生きるのか判らないが。

たった一人であの世へのドアを開けなければいけないその時に、向こうから開けてくれるのがコイツなら。

それは、とてもステキなことかもしれないかった。

日番谷は、つかの間、子供のように目を見開いた。

そして……

笑った。

「お前は、お断りだ」

なんで！　夏梨がそう言う前に、日番谷は続けた。

「またな」

ふっ、とその姿が掻き消える。

「……」

夏梨は、柵に捕まったまま、日番谷が消えた場所を見つめ続けた。
またな。

明日かもしれない、来月かも、来年かもしれない。

でもきつと、またこんな風に、現世で日番谷と会えるなら。

それはそれでやっぱり、とてもステキなことだ。

「と……冬獅郎は？」

夏梨の背後から、追いついた一護が身を乗り出した。

「行っちゃったよ」

夏梨はサッパリした口調で言い放つと、くると柵に背を向けた。
実際のところ、実にサッパリした気持ちだった。

「一兄！　いつまで柵にへばりついてんだよ！！　変質者扱いされ
っぞ！」

「は？　へ？」

絶句する一護を見て、夏梨は……大声で笑った。

24 HOURS

FIN.

10. カーテンコール（後書き）

ここまで読んでいただいたかたがた、ありがとうございます^^
BLEACHの二次小説倉庫より引っ張ってきた作品です。

日番谷君中心サイトを運営してますので、よろしければどうぞ♪

⇒ 妄筆 <http://mohitsu.chottu.net/top.html>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8703/>

24hours

2010年10月10日22時46分発行